氏　　名	石　井　琢　郎（イシ イ タク ロウ）
学 位 の 種 類	博　士　（美　術）
学 位 記 番 号	博　美　第 250 号
学位授与年月日	平成21年 3 月25日
学位論文等題目	〈作品〉からだと空洞、My cave、Between 〈論文〉空洞の彫刻
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　准教授　（美術学部）　林　武　史
（論文第１副査）	〃　〃　（　〃　）　布　施　英　利
（作品第１副査）	〃　〃　（　〃　）　原　真　一
（副査）	〃　教　授　（　〃　）　山　本　正　道
（　〃　）	〃　〃　（　〃　）　深　井　隆

（論文内容の要旨）

空洞は私にとって身体である。身体とはからだと心を含めたものであるが、では、なぜ私にとって空洞は身体なのか。空洞とは、何も無い部分とそれを囲っている部分である。それは、物質と非物質のあいだにあるものであり、そのどちらにも属さない。その二つが共にあって初めて空洞として存在するものである。これは、まさに肉体と精神から成る私たちの身体の構造と重なる。身体とは、物質であるからだと非物質である精神の二つがあって身体と呼ぶと私は考えている。空洞への考察と、彫刻の制作実践によって、私の考える身体イメージと私にとってのリアリティである原在感を私の彫刻空間に存在させることを目的としている。

身体を感じさせる虚の空間の一つにポンペイの石膏がある。また、彫刻家の中で身体を感じさせる虚の空間をつくり出しているのが、アントニー・ゴームリーである。この二つの空間は両方ともにからだの表面を境界として虚の空間がつくられている。ゴームリーは、からだの表面を境とした内部空間が精神の入れ物であるとし、からだの表面に空洞の物質的部分を規定していると考えられる。私は、人間の物質であるからだと、非物質である精神や意識といったものを、からだの表面を境界とした内と外として規定することは出来ないと考えている。なぜならば、私が自分の精神や意識といったものを感じるときは、常に、自然や風景といったものに出会った時であるからだ。その時に、精神や意識といったものは自らの外と内のどちらに属しているかわからなくなる。なかでも洞窟に入ったとき、その境界は、からだの表面であるのか若しくは洞内空間の表面なのかすらわからなくなる。境界とは常に揺らいでいるものであると私は考えている。また、私は自然の洞窟や古墳といったものから、不穏な感覚と神秘性と両方の感覚を同時に得ていた。不穏な感覚とは、主に空洞の暗闇などから感じているものであり、それは人の負の心理を呼び起こすものである。神秘性とは、人の身体スケールを超えた洞窟の生成過程や時間、古墳においては、内部空間に今も残る太古の人々の痕跡や想いといったものから感じられる。私は空洞の彫刻を制作するにあたり、不穏な感覚を引き起こすものを考察することで、私がつくり出す空洞が、神秘性をともなう自己の身体スケールをも超えた未知へと触れることが出来るのではないかと考えている。

本論の展開は、第一章で、空洞の考察へ至るきっかけとなった作品《Flower field》について延べ、考察の動機の中に洞窟や古墳での経験が影響していることについて言及した。自然の洞窟と古墳の考察から、それらの内部空間から感じられる不穏なものと神秘性とが表裏一体の関係であることを指摘し、

物質的部分と非物質的部分から成る内部空間は、フィジカル（物質であるからだ）な要素とメンタル（非物質である心理）な要素を含んでいることについて言及した。そして更に、自然の洞窟をより具体的に考察した。調査した洞窟は橋立鍾乳洞、日原鍾乳洞、印野胎内樹型、船津胎内樹型、駒門風穴である。橋立と日原は鍾乳洞で、印野、船津、駒門は火山洞である。同じ洞窟といえども、その生成過程は全く異なり、本論中では、それぞれの生成過程をふまえ、洞内空間に対し、洞窟の表面、洞窟の時間、洞窟の暗闇との三つの要素に分けて考察している。洞窟の表面では、自身の制作時の身体と自然の営為との関係、洞窟の時間では、火山洞と鍾乳洞の生成過程から止まった時間、生成する時間について論じ、洞窟の暗闇では、洞内で感じる不穏な感覚について言及し、これらと自己の作品への影響について述べた。そして、このような経験と考察を作品《My cave》で実践することによって得た、内側の空間へのアプローチの問題について述べている。

第二章では、内側の空間へのアプローチの問題に対して制作した《Between》の制作の中で、内側のかたちに身体が写り込むことで、これまでの虚の空間が空洞へと変容したことについて述べた。そして、空洞の考察を深めるために囲まれた空間とその外枠に焦点を当てた。ポンペイの石膏とゴームリーの作品から、虚の空間は立体的な影であると考え、影とイメージについて、平面的な影と立体的な影に分けて考察した。ムンクは影を変形させて描くことによって、心理的な表現を強くすることに成功している。ポンペイの石膏やゴームリーの虚の空間といった立体的な影も、からだの表面を外枠としているが、私はムンクのアプローチを引用し影のかたちを変化させることで、立体においても心理的表現をより強くする可能性を考えた。ジュゼッペ・ペノーネの作品では、外枠を自身の手足をのばした状態の外側に規定することによって内側の領域を広げ、そこから感じられるイメージの幅が広がったと見ることが出来た。それによって私の作品の方向性を示唆した。そして作品《からだと空洞》の思考を述べることによって、空洞と身体性に対する私の現在に置ける思考を論じた。

空洞は、その囲まれた何も無い部分を意識化させることによってどのようなものであるかが決められる。その囲まれた部分をつくることにより、私は空洞をつくってきた。自らが囲む部分をかたちづくることによって生まれる空洞と、そこから生まれるイメージは、限りなく変容する可能性を秘めている。空洞をつくるということは、まさに身体が空洞に写り込むことである。その身体とは原在感を含み、そのイメージも変容していくのである。そのような身体のイメージと原在感が私のつくる空洞に感じることが出来た時、私の彫刻とは空洞であると言えることを結論としている。

（博士論文審査結果の要旨）

この論文のテーマは「空洞」である。ふつう、彫刻はかたまりの芸術といわれる。何かがあるから彫刻なのだが、ここでは、あえて逆の「何もない」空洞が論じられる。もちろん、かたまりの存在と、空洞は表裏一体の関係であり、空洞を論じることも「彫刻とは何か」ということを論じることになるのはいうまでもない。

この論文は、第一章「囲まれた空間－洞窟と古墳の考察から」では、自然の地形の中にある洞窟、およびそれと似た空間である古墳の石室などについて論じられる。人体彫刻においてはモデルである人体が造形の出発点になるが、「空洞の彫刻」の筆者は、人体という自然ではなく、洞窟という自然から、空間性、造形性、さらには美のありようを学ぶところから出発する。

第二章「空洞の彫刻」では、自身の作品が紹介され、さらにはアントニー・ゴームリーや高松次郎など、空洞の芸術とかかわる作品が検討される。筆者は、石膏取りに際し、その型の空洞性にインスピレーションを受けたことから、その制作は論文執筆を始めたと告白しているが、もちろん筆者以前にも、「空洞」の芸術は存在し、それを自身の作品と比較考察することで、その芸術に深みを出すのは当然、必要とされる作業である。

物質と非物質、立体的な影と平面的な影、境界、揺らぎ、そういったさまざまな問題と格闘するなかで、筆者はひとつの芸術観を獲得していく。空洞の彫刻が、「私のイメージによる身体像」となり、そこに「リアリティ＝原存感」を見出す。

この論文は、石膏取りという、彫刻制作の一現場のエピソードから出発した筆者が、自然の洞窟や古墳、さらには過去の美術作品、そしてそれらに触発されつつ制作された自身の彫刻作品、そういった芸術とその周辺のあれこれを論考の素材とすることで、筆者の彫刻のテーマ、美のありようが浮き彫りにされていく。彫刻という芸術にとってのもっとも大切な問題を、空洞といういわば裏返した世界から描き出していく。その視点は新鮮であり、こつこつと問題を深めていく姿勢は高く評価することができる。この論文と一緒に提出された彫刻作品とセットでみても、その論文の価値は意義深いものである。

よって、この論文を合格としたい。

（作品審査結果の要旨）

石井は空洞を作る。空洞とは本来何も無い空間を指すが、石井のそれは違っている。かたちとかたちなきものの織りなす出来事の場、内と外、物質と精神といった、二つの境界にある不可視の領域を空洞とし、そこに身体的にアプローチすることで彫刻の成立を試みる。

作品「My cave」では、手で握った粘土の形を遠近法を用いて人の背丈を超えるまでに拡大し、それを石膏によって包み込み中の粘土を掻き出すことで空間を作った。中に入ると光と音は減少し壁の表面には荒々しい土の層に混じって人の手の痕跡が混沌と残り、ポジとネガが逆転した表面につつまれる。不安な感覚を誘発させるが、同時に、奥の小さな穴から入り込む光が神秘的でもある。自然の洞窟に入った時の緊張に似た感覚を再現しているようだ。視覚だけではなく「からだ全体」に作用する作品として成立している。

作品「Between」では、石材を中心から彫り進める事で空洞を作ろうとした作品である。空洞とは内と外のせめぎ合いから成り立つ空間である。当然、彫られる石にも内側が必要なのだが、その石の内側とはどこか？石井は言う。「割る前までは内側であった部分が割られたと同時に表面へと変化してしまう。我々は石の内側を目にする事は不可能なのである。」石に内側はない。我々の目に見えるのは、外側だけなのである。ここで空洞の成立条件は揺らいでしまうが、そこに感じられる言葉だけでは言い表せない、危うい「揺らぎ」こそが石井の言う身体性であり、空洞である。覗き込んでみると、石の内側は削り取られ、それは物質感をかすかに残した薄い物体となり、ついには穴があき崩れていくぎりぎりの地点で留まっている。内側は外側との連続帯となり、残されたのは作り手の行為によって重さを剥ぎ取られた表層だけとなった。

作品「からだと空洞」は、石の中に人が入りこめる事を目的に、その大きさが決定されている。重量約８ｔ、高さ２ｍを超える花崗岩の中心部を人型にくり抜き実際に中で人が立ち上がれる空間を作った。外側は石の割れた肌をそのままに、中は柔らかな曲面で覆われ、正面奥の壁には、ちょうど人の腕がはいる程の穴が裏側まで弧を描き貫通している。腕を差し込むと壁を抱き込む格好になる。鑑賞者は中に入り込み、内部の音が反響する、どこか瞑想的な空間の中で、石に包み込まれ石を抱く事になる。

いずれの３作品も、ある距離をおいて視覚的に鑑賞するタイプの彫刻ではない。理論的な文脈のみを辿って理解できる作品でもない。それらは、鑑賞者に「中に入る」「覗き込む」「抱く」といった移動を促し、用意された空間を何よりも「からだ」で体験する事で、身体的感覚のみならず記憶までを刺激する装置になっている。形である装置と形のない記憶のようなものが融合する「場－空洞」それ自体を彫刻作品として作り上げた。この世の境界にある不可視の領域を彫刻化しようとする根源的で難解なテーマに挑戦し、非常に高いレベルで作品を成立させた事を高く評価すると共に、今後の新たなる展開に期待したい。

（総合審査結果の要旨）

石井琢郎は、本研究において肉体と精神を併せ持つ身体を、形の在るものと形の無いものとの相互関係である“空洞”になぞらえ、内と外の境界の揺らぎを導き出すことで、身体の彫刻に挑戦した。それは、人のかたちを造らずとも精神や意識の存在を実感できる身体をどのように彫刻表現するかといったものである。

提出論文で論考されている、古墳内部の身体性や洞窟を構成する表面、時間、暗闇などは、内部空間から感じられる不穏なものを想起させる。これらは記憶をもとに内奥へと進む行為を誘うものとして提出作品３点に通低している重要な要素である。提出作品「My cave」は、洞内空間から感じる不安や恐怖、神秘性を決して握り尽くせない一握りの粘土から発し、決して辿り着けない光の隙間を創出させる。石膏への思いを論文内で述べているが、本作品が負の心理を増幅させた存在感ある彫刻（洞窟）となり得ているのは、形状、大きさ以上に石膏といった素材を選択した点である。彫刻と素材の間を行き交う思索の跡を強く感じる作品である。作品「Between」からは、石に対して直接内部空間を造ることで、身体を感じる為の虚の空間から、身体が写り込む空洞へと変化することを試みている。石を彫り進めることで穴が開き、内と外との境界が曖昧となり揺らぎを生み出した。石井の石を彫り進める愚直なまでの姿勢は、虚の空間への強い追求の表現へと転化した。これは彼の精神性を強く感じる作品である。作品「からだと空洞」では、直接肌で体感できる空間を造る為に、自らが石の中に入り込むことができる大きさの穴を彫り、その穴の中で影を抱くといった独自の表現方法へと展開している。野外空間に静かに佇む巨大な石。しかし、その穴の中には目に見えないうごめく何ものかを感じる。それは不穏な感覚を閉じ込めたようにも思われる。自らの体の機能を十分働かせたことで得られた多くの出会いや出来事の充満した作品であり、秀作である。

石井は、形の在るものと形の無いものとの間を浮遊する揺らぎの空間を空洞と称し、原在感のある場を創出することで「空洞の彫刻」を造る。このような負の空間、心理を展開し独自の美意識構築へ導く過程は評価できる。それは現代人の内へ向かう負の傾向をも示唆するものでもある。

審査は主査、副査、および彫刻科教員全員で行った。第１回審査は平成20年10月３日に実施された。その際の指導のもとに申請者はさらに研究と修正を加えた。第２回審査は「博士審査展」期間中の平成20年12月12日に公開発表会で行われた。申請者は、この約２ヶ月間で提出作品の一層の充実を図り、完成度の高い作品とした。また提出論文においても、論述展開、彫刻研究の内容ともに、思索の痕跡が随所に見られ、好感の持てる博士論文になった。

以上のような結果から、審査にあたった主査、副査ならびに彫刻科教員一同、全員一致で博士学位授与に相応しいと判断した。